

『大胆に恵みの御座に近づこう!』 (要旨)

聖書箇所：ヘブル 4:15-16

【1】 知れば知るほど

小さな子どもたちは遠慮しません。欲しいと思えば欲しいし、いらな思えばいらな思えば素直です。次第に年を重ねる中で、自分の意見がそのまま通らないことを経験したり、相手の気持ちを汲み取るようになり、慎ましくなります。そして遠慮し身を引くことを覚えます。こうした「慎ましき」や「遠慮」は、自分と他者の間にある距離感を学ぶことで身につけていくのでしょうか。そうした傾向は信仰生活においても見られます。信仰をもった時、神様に真っ直ぐに祈っていたのに、率直に祈り願うことのためにためらいを覚えることはないでしょうか？ 神様と自分の間に大きな隔たりを感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。「聖なる神」の聖さを知れば知るほど、惨めで罪深い自分の姿を認識します。そうした者たちに「大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」(ヘブル 4:16)と促すのです。

さて、ここで言う「大胆」(名詞)とはどのような意味を持つのでしょうか。このギリシャ語の名詞は、堂々と自信をもった状態、恐れ知らずの意味があります。つまり、神の恵みを求めるにあたって、遠慮せず神に近づきなさい、とされているのです。

「大胆に」と言われるのは、私たちに思い切っ神の恵みを求めることなど、恐れ多くて自分にはできないと、ためらう傾向があるからでしょう。子どもの時は、率直で、無遠慮で、欲しいと思えば欲しいと言うし、いらな思えばいらな思えば言うと言っていたのにです。

【2】 聖なる神と罪ある人間を隔てる幕

神の「御座」(王座)に近づくと簡単ではないことは、聖書を読めば一目瞭然です。かつて、エルサレム神殿に「神の御座」が設けられていました。その位置する場所は、神殿の一番奥でした。大きな垂れ幕がかかっており、人々は神の御座を見ることはできませんでした。その場所は「至聖所」と呼ばれていました。聖なる神殿のもっとも聖なる場所である「至聖所」

に近づくことができるのは祭司の中でも特別な大祭司だけでした。万の単位でいる祭司の中で唯一大祭司だけが近づくことができたのです。しかしその大祭司も、一年に一度しか入ることが許されませんでした。しかも細心の注意を払い、多くの動物のいけにえの贖いの血を携えて神殿の聖所と至聖所を隔てる幕をくぐったのです。神と人との間にある隔てを知る者は、決して「御座」に安易に近づくことなどできませんでした。

*無遠慮に御座に近づき命を奪われた人物にウジヤ王がいました(参照:II歴代 26:16~23)。

旧約時代の祭司は、罪ある人間と聖なる神を隔てる幕を通る際、いけにえの動物の血を携えて入りました。それは神に敵対していた人間の罪を背負い、神の御座に近づくことを意味しました。

【3】 大胆に恵みの御座に近づこう!

なぜ聖書は、罪ある人間が、近づくことのできない聖なる「御座に近づこう」と勧めるのでしょうか。

マタイの福音書 27 章 51 節は、主イエスが十字架にかけられ息絶えたその瞬間、神殿の聖所と至聖所を隔てる幕が真っ二つに裂けたと伝えます。それが意味することは、主イエスの十字架の贖いによって、至聖所の幕が取り払われたということです。キリストは、ご自身の血を持って、私たちのすべての罪の贖いを成し遂げてくださったのです。主イエスが私たちのためにいのちを注ぎ、私たちの罪を赦し、きよめるためのいけにえとなってくださった。主イエスの贖いのゆえに、私たちは今朝も赦され、助けを得るために、感謝を捧げに、祈りを携えて、自由に、はばかりことなく、躊躇することなく…神の恵みの御座に近づくことができるのです!

▷新しい年、共に大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか!

